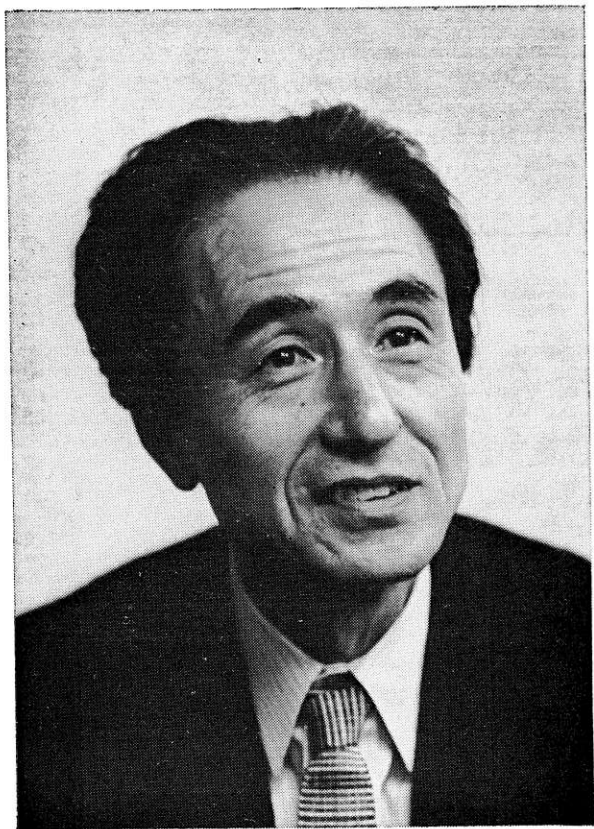


目にうつるものがまことに美しいから

松本得三氏追想・遺稿集



松本得三氏遺影 (1976)



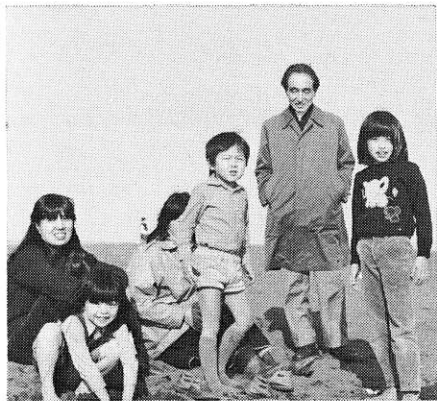
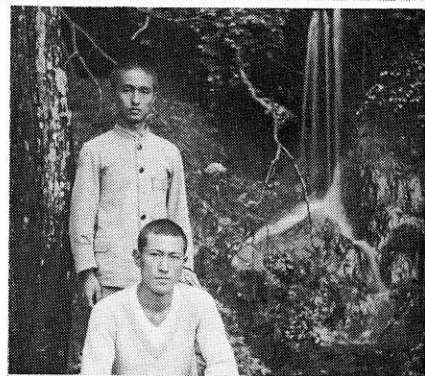
岩手山三ツ石山荘にて 一家の記念写真 (1960年8月10日)



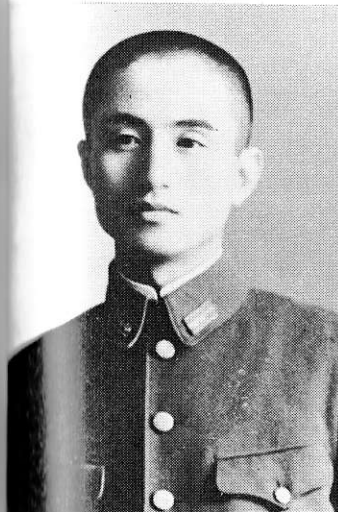
上 幼年時代 後列左端、父親に抱かれる松木氏。生家の茶室<不染庵>の前で
右 戸隠中社にて 前に友人坂巻氏。京都大学時代 (1934年8月29日)

下右 朝日新聞社入社の際 先輩と共に (1939年5月)

下左 若き日の肖像 (1944年11月16日)



右 相模原市長選挙 (1977年1月)
上 葉山海岸にて 娘さん、3人のお孫さんに囲まれて (1980年1月)



目 次

追想文集

学生時代

得さんの想い出……………	脇 直 人	四
松本君とボート部の想い出……………	八 木 健 三	六
私信——端艇部時代の松本君……………	高 木 公 三 郎	九
追想……………	小 野 勝 喜	二
松本得三との交遊と別れ……………	仁 瓶 康 平	三

朝日時代

入社のごころから……………	江 藤 文 比 古	三
新兵と古兵……………	吉 村 益 郎	三
キレイなひと、松本君……………	山 田 俊 雄	五

松本さんと風呂……………村 幸彦 元
 松本君の「仕事」……………熊倉 正弥 三
 潔癖な求道者……………岡田 任雄 三
 同じ屋根の下で——敗戦直後……………白井 伝平 三
 松本得三氏 追想……………後藤 基夫 三
 松本キャップ……………一柳 東一郎 四
 研究報告「現代のカトリシズム」……………大森 繁雄 四
 『言葉と自治体』によせて……………早稲田 稔 四
 薫風去って……………今津 弘 五
 筋を通した仕事ぶり……………林 睦 夫 五
 「すばらしき先輩」松本さん……………辻 謙 五
 サツ回りをやれといわれて……………木原 啓吉 六
 薪ストーブの温もり……………沼口 好雄 六
 人生の師・松本さん……………岩 垂 弘 六
 不来方町のある「遊び」……………轡田 隆史 六
 「遺言」を胸に……………伊藤 源之 七
 三陸行……………三船 虎夫 七

電光ニュースを書く松本さん……………太田 博夫 七
 松本さんのゴルフの思い出……………相沢 早苗 七
 温かい反骨……………秦 正流 八
 忘れ得ぬこと……………安竹 一郎 八
 住民自治への強い信念……………杉 本 一 八
 松本さんの「目」……………坂本 龍彦 八
 松本さんの葉書……………石川 真澄 八
 ソ連捕虜第一一八収容所……………佐久間 英弼 八
 松本得三さんの死とジャーナリスト……………岩 井 章 八
 凜然とした人……………宗 像 寛 八

横浜時代

「得さん」のこと……………飛鳥田 一雄 一〇三
 横浜市役所での松本さん……………入江 昭明 一〇五
 横浜市役所の良心……………大澤 浩 一〇七
 松本さんが怒ったとき……………大山 浩朗 一〇
 都市科学研究室での松本さん……………岡村 駿 一三

想い出・断章	佐々木 寛志	二四
詩 秋霜の人	助川 信彦	二七
禁煙協定	鈴木 和夫	三四
市民 松本さんの「横浜と私」	田村 明	三七
松本さんの言葉	中川 久美子	三〇
きびしく優しくかった読者	中村 紀一	二三
「時の流れ」の意味	中村 文江	三五
松本さんとの対話	鳴海 正泰	三七
松本さんに教わったこと	横山 悠	三九

晩年

病気は神の恵みである	門脇 佳吉	一四
聖書と松本得三氏	K・H・ワルケンホルスト	一五
今という時を大切に生きる	酒井 俊雄	一五
「ドン君のおじさん」を偲んで	石井 賢国	一五
松本得三氏のカルテ	高橋 俊毅	一三
忘れられない「ありがとう」	砂塚 雅子	一四

回想の姿	箕形 政之	一五
叔父のこと	松本 行博	一七
兄の思い出	吉田 府二子	一七
父の闘病生活	松本 道郎	一七
糸	大倉 みちる	一八
道しるべ	松本 幸子	一八

遺稿・論文集

朝日時代		
生駒山 生活所感		一九
甲府		一九
地方と中央		二〇
抜けぬ「支配の思想」		二〇
波		二〇

お役所追及の手法ないか／行政改革は素通りした／切り込み不足、討論の司
 会者／「解散」番組に見る報道姿勢／選挙番組にも新しい型望む／「公費天国」

の報道に結末を／政治への視点、NHKに疑問／朴大統領事件、意外な発言も
 ／時代遅れの「政治討論会」／自己取材した決め球を持って／独特の発想もま
 め切れず／新しい角度の「財政」論議を／「税支配者」の期待をになえ

横浜時代

住民と役所との間柄……………二九

——個別事例から——

「弱い立場の市民」……………三七

私の考えたこと……………三四

——候補者の立場から——

「市役所」は残った……………三六

普通の老人の体験的老い……………三六

晩年

神学講座の聴講を終えて……………三三

——佐久問師へのレポート——

地獄谷のぬくもり……………三七

松本得三氏 年譜……………三七

故松本得三氏に弔意を寄せた方々……………三五

編集後記……………三九

“得さん”のこと

飛鳥田 一雄

“得さん”などと云う呼び方を、私は岡田任雄に教えられた。

ちょうど、私が横浜市長に就任して二、三年たった頃で、富士山の頂上に落下傘降下したような思いで一杯だった頃である。官僚群にとりかこまれるのは覚悟の上だったが、感じ方や、もって来る官庁流文章のマンネリズムに閉口していた時でもあった。旧制中学で同級生だった岡田任雄から、「オイ大阪朝日にいる松本得さんを市役所に入れないか」と誘われた。まだおめにかかったこともないひとであったが、その時以来“得さん”“得さん”で通してしまった。

その得さんに私は、「都市科学研究室長」というポストを創って、お願いすることにした。その彼に私は、「都市科学研究室長なぞといういかめしい名前をつけないかぎり通用しない官庁の哀れさをまず知って欲しい、そのかわり何をやっても結構ですよ、出来れば先ず、固苦しいこの組織の中で息をころしている若い連中を自由に解放してやって下さい。僕の勝手気儘な放談の相手になって下さいな」とお願いしたものである。官僚主義をブチこわして欲しかったのである。

そのとき僕のいくつかの随筆を文筆の人である得さんが賞めてくれたことも大変嬉しかったのを憶

えている。

ところがどうだろう。得さんが仕事を始めてみると、とたんに反響がつきつぎに私のところへ挑ねかえて来る。

彼の始めたことは市役所の若者を集めて、研究会——むしろ放談会をつくったことだった。

局、部、課に系列化され、その系列の中でしか仕事をやってゆけない官庁で、それを超えてグループをつくるなどとはもってのほか、権威を損なうこと甚だしいというのである。

しかも、どんな場合でも「私」から出発し「私」の目で確かめなければ納得しない得さん流。その反面、集団、組織といったものの既成の規範になじまない、というよりはその虚構性、タテマエに抵抗するところに松本イズムの本髄がある。反発の出て来るのは当然であろう。

加えて、自分自身に最も厳しいカトリック信者、絶対にウソのない人が若者の信頼を集めるのは当然で、朝日新聞社でもそうだったそうだが、「松本学校」が隠然たる力を持ち始め、だからこそ旧態依然たる職制からの不満が生ずる。

やっているなと私はひそかにほくそ笑んだものであった。

彼の心情としては、多くの無党派、無関心層の市民に最大の関心を寄せ、この層をどうにも出来ない既成政党や政治に批判の目を向けていた。私も、一万人市民集会を主張し、草の根民主主義を必死になんて主張している最中なので、百万の味方を得た心であった。

市会でも、「民主的な議会」があるのに何で改めて市民の声を聞くのだ、それは議会に対する侮辱で

はないのかなどやかましい。

得さんは先ず、そんな議会に、言葉から挑戦する。「市民生活白書」を『横浜と私』と改題した。「白書」などという役所の側からの発想ではなく、市民一人ひとりの側から市政を見ようとするのだ。市民の側から主体的に市政にかかわってゆこうというのだろう。

それに『横浜と私』についても、彼の徹底した手作り主義には恐れ入った。彼は自分自身の肉体に対しても厳しかったそうだが、作品についても厳しい。他人のつくった原稿について、自らが現地、現物について必ず当ってみなければ気がすまない。小さなことでも必ず手を入れて自分のものにしてしまう。さぞかつて彼の部下だった記者諸君もつらかったろうと同情をした次第だが、やはり、出来上がったものは立派だった。

市内の書店に出してみるとまさにベストセラー。おそらく市役所の出版したものでこんなに売れたものはなかつたろう。街に出てみると「市長さん、よいものが出来ましたね、市政と私たちがズッと近くなった気がします」と、彼の所謂、無党派、無関心層、殊に主婦の人々に言われる。都市科学研究室長などという官庁流のいかめしい言葉で、自由人たる得さんを迎えたことが恥ずかしいほどであった。

ところが私は得さんに対して大変な失敗をした。相模原市の市長選挙に無理に立候補して貰ったことである。

草の根民主主義を、市民ひとりひとりの主体的な市政を、と考えたのだが、申訳ないことだがまさに失敗であった。

選挙などというものは、まったくマスプロの最たるものであることは百も承知で、横浜の労組、市民を何千人と動員してみたのだが、得さんの手作り主義をカバーしきれなかったのだ。

いまでも、申訳ない気持で、一杯である。

「何あに、よい経験をしましたよ」と私をなぐさめてくれながらも、彼の手づくり主義、草の根主義の信条は動くけはいもなかった。

(日本社会党委員長・元横浜市長)

横浜市役所での松本さん

入江 昭明

松本さんと最初にお会いしたのは、たしか昭和四十五年の初夏の頃だったと思います。田村明氏と鳴海正泰氏の紹介によるものでした。横浜市の付属機関として企画調整室の内部組織として都市科学研究室を新設することになり、初代の室長として朝日新聞社を退社された松本さんを迎えるための手続きを打合せするためでした。当時、私は企画調整室の調整課長の職にあり、都市科学研究室設置の手伝いをしておりました。なにしろその二年前にできた企画調整室そのものが、従来の地方自治体の企画部門にありがちな固定性を打破して、極めて大胆かつ柔軟に都市行政の実際面に切りこんでいこう

という試みで出発しただけに、抵抗も多く全庁的に理解されるまでに至っていない時期だっただけに、都市科学研究室の設置は、いささか奇異に感じられるというのが、当時の状況でした。研究室の名称のほか、同研究室に課せられた命題である都市問題・都市計画・自治体問題の科学的調査研究という言葉自体がこれまでの自治体研究機構のそれとは趣きを異にしたものでした。自治体行政のすべてと言ってもよいくらいに広範な命題を、わずか数人のスタッフで、どこから何の手がかりに進めるのか、また将来どこまで発展させていくのか、私自身にもよく判らない面がありました。とりあげるテーマや方法論によっては各部局はおろか、親元とも言える企画調整室の機能とも抵触しかねないという心配もありました。こんなことを何度か松本さんと話し合いましたが、最後まで結論は出ずじまいでした。しかし、松本さん自身は、制約された条件の中で自分がどういう役割を果たしたらよいか、また果せるのか、かなり承知されていたのではないかと思います。とにかく松本さんの思いどおりにやってもらうしかないだろう。その過程で何か問題が生ずれば、その時点で及ばずながら何かのお役に立つこともあるだろうと私なりに自分を納得させた記憶があります。こうして横浜市参与、都市科学研究室長として松本さんをお迎えすることができました。

松本さんは、私がこれまで新聞記者に対して抱いていたイメージを覆した人でした。少しのたかぶりもおごりもなく、控え目で、しかも自らにきびしく実に清新な印象を与える方でした。柔和なお顔でたんたんと語られると、つい私自身も話にさそいこまれてしまい、後になってその奥にある真実に気がつくという経験も何度かありました。つねに松本さんの意識の底にあるものは「市民」であり、

松本さんほどただの市民、日常的な市民生活を大切にされた方はないと思います。市民の意識や、生活の実態から遊離した行政の執行や公務員の行動を誰よりも憂慮されていました。都市が巨大化し、仕事の量や範囲が拡大すればするほど、行政は善意であっても本当の市民の姿をとらえられなくなるという心配をお持ちのようでした。松本さんが在任中、地域における市民の生活実態や市民の意識をケーススタディーをおりまぜながら克明に調査し続けたり、行政と住民との間で持ち上ったちょっとしたできごとにも、異常なほどの熱心さで現地調査をし、問題の発端から結果までの一連の過程を再現し、その中から行政の対応のしかたについて考え直してみるという手法などは、私たちに新鮮な刺激を与えるものでした。無数にある行政事例をときほぐし、巨大な行政機構に何等かの変化を求め、迫っていくこと自体、気が遠くなるほどの道のりであることは判っていても、あえて一石を投げ続けられたのも、松本さんの人間性と生き方がしからしめたものではないでしょうか。

松本さんの御冥福を心からお祈り申し上げます。

(横浜市民生局長)

横浜市役所の良心

大澤 浩

松本さんが横浜市役所に迎えられたのは一九六九年で、その年、私も市民局広報課広報第二係長

(印刷物担当)に任命されました。マスコミ出身の飛鳥田市長のブレイン、そして参与という肩書きに、近々市民局長になるんじゃないかとウワサしたものでした。もちろん広報課との関係もすぐでいき、横浜市広報企画審議会委員、横浜市職員庁内報編集委員という立場から、有意義な意見を出していただきました。しかし松本さんは役所の通例として会議の席上での発言が実りにくいことは十分承知しており、広報課職員個々の意識改革をはからなければ——と当初から考えていたようです。

一九六九年の横浜市は、一五年間続いた飛鳥田市政の第二期のちょうど半ばで、人口が一年間に一〇万人という爆発的な増加を続けていた時期でさまざまな都市問題が発生していました。一方革新市政ということで、直接民主主義をスローガンに広聴制度が充実され市民と市役所のパイプが太くなったため、あらゆる要望が寄せられました。又、革新自治体における職員の役割が、熱っぽく問われたときでもありました。

当時三〇代に入ったばかりの私は、新しいポストにはりきっていませんでした。市民参加を標ぼうする以上、市民の皆さんにできるだけ多く市政の動きを伝えなければならぬという観点から、仲間と一緒に膨大な量、種類の印刷物を作成しました。編集の基本も「これが横浜市のおかれた現況」といった問題提起型でした。こうした方向が考える市民、行動する市民を育て、やがては本格的な市政情報の公開に結びつくという真剣に考えていたからです。

ところが松本さんは「君たちの意気込みは買おう。しかし実際のところ、記事の内容は市役所に都合の良い情報だけじゃないか」という立場から、多忙な中をたびたび第二係の仲間との接触到に努めら

れました。「市役所は市民の問題を、どこまで市民の立場で考えることができるか」という一点に、強い関心を示していた松本さんにとって、ある意味ではまっさきに「洗脳」しなければならないセクションだったのでしょう。

そして接触が深まれば深まるほど、私は強い影響を受け、松本ファンになっていくのでした。しかし、一係長の分際で既定の編集方針を変えることは難しく、ジレンマに陥ったことも事実です。こうした中で市民グラフ「ヨコハマ」を創刊しましたが、この媒体に限って単なる市政のPRはしない、行政として市民に要求することはやめようという方針をたてました。ユニークなグラフ誌として市民のファンも多く、自治体発行の印刷物としては異例の高い評価を受けていますが、これは「一方的な問題提起はやめたら」という松本さんのアドバイスのおかげです。

飛鳥田市政の第三期は一九七一年から始まりましたが、この頃から施策の建前と本音の乖離が、だんだん大きくなってきました。市民参加の市政を唱える以上、情報公開は不可欠の要素ですが行政の具体的な動きはありませんでした。それどころか新貨物線建設反対運動、地下鉄三号線建設ルート変更運動など住民運動が盛んになるに伴い、ますます非公開の傾向が強まっていったのです。私や第二係の仲間にとって松本さんの存在が大きくなればなるほど、情報問題に対する横浜市首脳部の姿勢に疑問はふくらむばかりでした。市政情報を市民に伝える第一線の係長として、心身ともに疲れ切っていたのです。

ある日、そんな心境をお話ししたら「異動した方がいいよ」のひとこと。配転希望を出したところ

次期選挙が終るまで待てということになり、一九七六年に六年間勤めたポストを離れたのでした。翌年、松本さんも横浜市役所を去っています。サヨナラの日、革新市政下における「横浜市の良心」が消えてしまったと深酒したことを覚えています。

(横浜市市民局)

松本さんが怒ったとき

大山 浩朗

相模原市役所から狂犬病予防注射のハガキが届いた。松本さんは、愛犬を連れて出かけた。その帰りに保健所の窓口へ立寄った。若い男性職員が応対に出た。

松本さんは、ニッコリ笑って仕掛けた。「予防注射のハガキが届きましたが、同じものを二度出すのは公費のムダではありませんか？」しかし、相手の質は低すぎた。乱暴な言葉が返ってきた。

松本さんは、止むなく質問の要旨をメモに書いて手渡した。その職員は、メモを机の側に置いたまま閉せぬふりを決め込んだ。松本さんは読むように申し入れた。職員はメモを破いた。そしてゴミ箱へ捨てた。

事態は思わぬ展開となった。松本さんは、この経緯を所長に説明し、釈明を求めた。数日経て返事があった。「ハガキは市民への周知徹底を期して二度出している。部下の態度については、事実とす

れば遺憾であり、今後改めるよう指導する。」

松本さんが怒ったのは、この時であった。

たてまえと本音を役所自身が使い分けているのではないか？これが「言葉と自治体（調査季報4号）」を書く松本さんの動機となった。昭和50年の話である。

あの時、砂川氏（当時広報課）と私に執筆分担の依頼があったのは、砂川氏にたてまえを、私に本音を期待されてのことかも知れなかった。しかし、私は、松本さんの趣意を充分に汲めないまま、依頼どおり情報公開に関する判例の推移と自治体の無規範状況を舌に衣せず夢中で書き上げた。

今もって「言葉と自治体」が、全体としてどのような志向性をもって書かれたのか、私自身の内部では解（澄）け切っていない。それは怒った時の松本さんの熱気に、かすかな不安を感じたからにちがいない。その不安は、原稿が完成したときの松本さんの言葉（二人の原稿を読んで、私も執筆部分の内容を全面的に書き改めた。結果的によいものができたと思う）にも拘らず、打ち消されずにある。

最近「言葉と自治体」を読み返してみた。松本さんの怒りは、見事に沈澱していた。その意味では昇華された作品であるかも知れない。そして、その鋒先が、あの時から本市に向けられていたことに気づき、怯えに似た気持ちにさせられている。（合掌）

(横浜市立大学事務局)

都市科学研究室での松本さん

岡村 駿

初めて松本さんにお逢いしたのは、昭和四十五年七月二十日前後。横浜市役所に都市科学研究室（都市研）を開設する時であった。正規の職員一人（それが私であったが）を配せられて発足した都市研にとって、その道行きは多難であり、中味をどのように形成していくかということは、松本さんの心を大いに悩ませたにちがいない。しかし、一面では楽天的でもある松本さんは「枠組みのゆるやかな白いカンバスを提供されたという意味に受け取り、そのあり方だとか機構の問題などの論議をくりかえすよりは、都市研に与えられた条件を一応受けて、そこからできる仕事にとりかかってみる方が生産的だ」と考えていたようだ。以来私は、松本さんが四年八カ月の室長時代と、相模原市長に立候補するまでの通算七年近くを横浜の都市研で一緒に過ごした。

ともあれ、懸案であった第三回市民生活白書『横浜と私』の編集を終えて、本来の設立業務について。以後の活動を松本さんは次のように書いている。「私たちは終始、行政と生活の現場に近づくことに心掛け、とくに各局職員との連帯および調査研究活動へのその人たちの自発的な協力・参加を強く期待してきた。これは、都市研の力を補うために必要なことでもあったが、同時に調査研究の対象

を正確にとらえるためには、このような方法が不可欠であること、また官僚的な考え方を正すものについては現場であること、さらには役所の中では自発的な個人の活動および局をこえての協業はもっと重く視られてよくはないか、といった考えによるものであった。もちろん、そのような連帯・協力・参加の関係を保ち、さらに広げていくことは、職場によっては歓迎されず、時には不寛容のことすらあって、現場の職員にとっても都市研にとっても安易な道ではなかった。しかし、それを避け、常套的な方法に頼るのでは自治体の中につくられた研究室の貴重な意味を失うことにもなり、ひいては自治体が本当に解決を迫られている問題を提起する力がないのではないか」と説明し、個々の自発性を求めた。

また、在職中の松本さんの関心は、ただ一点にしぼられていた。それは「市役所は、市民の問題を、どこまで市民の立場で考えることができるか」という問題であり、とくに、行政内部の克服せらるべき問題、たとえば情報の共有をよるこばない役所の体質や「革新」によって創造せられるべき倫理などにふれる問題については、きわめて強い関心をもたれた。それらは、明らかに当時の自治体、とりわけ飛鳥田横浜市政が将来取り組むことを強く迫られる課題であり、また自治体の中につくられた研究室が扱う主要なテーマのひとつであったと思われる。

昭和五十年四月に松本さんは、体力的にも限界に近い状況を迎え、室長職を辞退し、煙草をやめてヨガを始め、週に一度の上智大神学部への聴講を楽しみにした。だが、それでもまだ多くの職場や地域に足をはこび、先の視点から、問題によっては職員と市民の気持ちに通いあうまで、あの独特のは

にかみに満ちた笑顔を浮かべながら、ねばり強く話しあった。ずい分と神経を使われたことだと思ふ。しかし、このような方法によって、昭和五十年度の市民生活白書『私の横浜』が編集され、職員を主体とする各研究会の組織や『調査季報』の特集、市民の生活意識と多層性に関する調査と分析など、市民側からみた行政の調査研究のかなりの部分が生れたのである。

もちろん、それらの成果は、市政の現実に早急に、また直接的に反映される性格のものではないとしても、松本さんの行動を支えたそのひたむきな姿勢は、都市研を訪ねる若い職員たちの心に深く伝播されたと思われる。私自身、その核心について、充分に理解できぬままにお別れしてしまったが、多分それは、私にとってまだ未知の世界である信仰の力によるものが大きいと思う。そのことは、最後に残された重い課題のひとつとなっている。

(横浜市総務局)

想い出・断章

佐々木 寛志

松本さんが室長をされていた都市科学研究室で、ピッツバーグ市の公害対策資料の翻訳をお手伝いしたことがあった。松本さんは、ときに私の机に來られ、にこやかな顔をされて、「カチッというのを貸してください」と言った。押すとカチッといって点火するガスライターのことである。

松本さんが相模原の市長選に立たれたときのことだ。松本さんを支持する人たちの「住民懇話会」の総会が開かれた。おしまいに壇上の松本さんに若い女性から真紅のバラの花束が手渡され、会場からは大きな拍手がわいた。これに答えて、松本さんは、精一杯と思われるしぐさで、その花束を両手で高く掲げた。会も終わった帰りぎわに、松本さんは、「もう破れかぶれだよ」と、やや照れくさそうに言った。

相模原の市長選が終わって、しばらくたったころのことだ。松本さんと横浜市の私たち何人かが久しぶりに会って、平沼町の角平でそばを食べることになった。集合場所の横浜駅西口に、松本さんは、ブルージーンズのジャケットにジーパンで現われた。そして、笑顔で「湘南へ海を見に行ってきた」と言った。たいそう若々しく、表情もはつらつとしていた。

松本さんと知り合って間もないころ、関内駅のホームで電車を待つ間、キリスト教の話になった。私の話には、「それで新教と旧教はどう違うのですか」と聞かれた。私の話が生半可で、どこか的外れていたのである。そのとき私は、松本さんがカトリック信徒であることを知らなかった。

茶飲み話の中で、松本さんが横浜市役所の係長試験の作文の出題を予想した。松本さんは、「今年

は、世代論と職員のリモラルだな」と言った。私は、そうかも知れないと思ったが、その出題を想定して準備はしなかった。松本さんの予想は、見事に当たった。

試験の合格発表があったころ、松本さんは相模原の市長選で文字通り忙殺されていた。私の合格を聞くと、松本さんは、時節到来というように嬉しそうに顔を上げて、作文の出題を当てたことを理由に、私に「市長選リーフレット」の下書きを頼んだ。その理由は冗談だが、私の書いたものに松本さんは手を入れ、それは『ある初夢』のタイトルのもとに生まれ変わった。

市役所の仕事のやり方や職場のあり方に対する疑問が強くなって、市役所をやめようかと思っていたころのことだ。すでに退職されていた松本さんが訪ねて来られたとき、雑談の中で、私が「やめるかもしれない」と言った。松本さんは、そのとき何も言わなかった。その後しばらくたって、ある雑誌の原稿を持ってみえた。その結びには、「いま私は君の背後に、多くの若い自治体職員の表情を思い浮かべています。どうぞ、最後まで最善をつくして下さい」と書かれていた。

恋愛と結婚について少し思うことがあり、松本さんのお宅へおじゃました。長い時間、いろいろな話をした。その中で松本さんは、「結婚の意味は、結婚を知ることでもある」と言った。所望した棕櫚竹の鉢をいただいた帰りぎわに、「でも、不便なことはよくないよ」と一言つけ加えられた。

* * *

松本さんとテレビでプロレスを見たことがある。一方のレスラーが、相手にこっぴどく攻撃されている最中だった。松本さんは、これを見ながら、「もうすぐ突如として立ち直るぞ」と言った。すると、そのレスラーは急に元気になって、反攻を開始した。笛吹川溪谷へ紅葉を見に行つて泊つた川浦温泉の旅館でのことだ。

(横浜市企画調整局)

詩

秋霜の人

助川 信彦

君とはじめて会ったのは

横浜市役所に都市科学研究室というものが新設されその責任者として

君が赴任して来てまもなくのころだった

新調の書架にはまだ本が入ってなくて

ガラガラのまま

林立していた室内で

卓を挟んで
三十分間ほど
四方山の話をした

「人に接するに春風をもってし
己れに対するに秋霜をもって望む」
これは――

中国から渡来した格言だが
君を見ていたら
そんな言葉が
脳裏を去来した

たまたま
ソ連圏のことなどを
考えて

この国には
自由があるからよい――とぼくは言った

君は
突然――
不機嫌になって
この国のなかでも完全な自由なんぞ
無いじゃないか――と
反論した

ぼくは――
黙って省みた
ぼく自身のなかでも
やはり自由は制限されているかも知れない
当時――
ぼくは市役所の公害行政の
責任者のひとりとして
公開の原則を堅持することを
建前として仕事をしていた

この原則の根底には
 自主と民主の精神があり
 科学技術行政は
 この三原則に拠って展開されるべき
 ものと考えられていた

それでも

一定の組織機構のなかに
 身を置いていると

ときには言うべきことをさし控え
 なすべきことも手控える傾向も

無いことはなかった

他人の目からは役人のひとりなのに

ぼくは好き放題なことを言い

勝手気ままにふるまっているように

見えたこともあったかも知れないが

やはり自分で自分を縛っていたところもあった

やはりぼくの自由は侵されているようだ

——とたばこを吸いながら思い当った

やがて君は言葉を重ねた

「ヨコハマの市民は

全部がヨコハマが好きで

ここに住んでいるわけではないであろう

鶴見川の濁流が

上流から運んで来た

ゴミのように

このヨコハマに流れつき

何かにひっかかって動きがとれない

そのような市民も少くないはずだ

その辺の事情にも目を向けたものだ」

新聞記者であった君が

どのような視点から
記事を書いていたのか
ぼくは知らなかったが――
前記の一語から
何となく察知できるような
気がした

君を市役所へ連れて来たのは昭和三十八年以後の
十五年間を横浜市長として過した

飛鳥田一雄氏であった

氏は「誰でも住みたくなる横浜づくり」をしたいと主張していた
誰もが住まなくてもよいが
住みたくなるような街にしたいという趣旨だった

君があのととき

言いたかったことは

住みたくてヨコハマに住んでいる人ばかりではない

むしろいやいやながらも住みついている市民も少なくないであろうその間の社会病理的事情を
追究し暖い目をそそいで行きたい――ということだったかも知れない

なるほど――と応じて

ぼくはさらに討論を重ねるべきであったのだが

君の「秋霜」のきびしさに触れた思いがしたので急に「春風」の笑みを浮かべ
またくると言って腰をあげた

その後――

研究室において君は

何冊かの「市民生活白書」などをまとめ

市役所に遺した

今でも研究室の書架に
君の知見が眠っている

そして昨年――

君は逝ってしまった

短歌

衷なる灯強めむとして戦ひし

君が生たしかに一隅に照る

信彦

(元横浜市公害対策局長)

禁煙協定

鈴木 和夫

昭和四三年の四月、横浜市に各分野の技術職の束ね役としての技監職と、縦割り行政組織の円のよ
うな役割を課せられた企画調整室とが新設された。時の市長飛鳥田さんの政策の一つの柱であった
「誰でも住みたくなる都市づくり」を、一気に推進するための布石であった。当時私は建築局長から
土木局長に転補されたばかりであったが、満五八歳に達する八月には市の慣行に従って勇退する予定
だったので、ぼつぼつ第二の人生の画策を始めていた。その私に三月末のある日、企画調整室長を兼

ねて技監に任命するとの内示があったのである。晴天の霹靂のような話であった。私は身の程を弁え
ていたので言葉尽くして辞退したが、遂にお引受けする仕儀となってしまう。知る由もなかったが
この時点で松本さんと私とのお付き合いが約束されたのであるから、縁は異なものという諺のとおりで
ある。

企画調整室が発足してかなり経ったころ、企画調整室の一部門として都市科学研究室が設けられ、
その長として朝日新聞の重職に在られた松本さんを迎えることになったと知らされた。そして間もな
く初対面の挨拶を交わしたそのお方は、私が描いていたイメージとはかなり隔りのある物腰の柔らか
い紳士であられた。私は技監室としてスベアの助役室を宛がわれ当初は独り住いであったが、松本さ
んをお迎えするところにはだっ広い部屋に数名の幹部と同居していた。まだスペースに余裕があつた
ので松本さんには失礼であったが、都市科学研究室が整備されるまでの間同居のメンバーに加わって
いただいてご辛抱願うことにした。やがて松本さんが旧制八高の同窓であることも判り、一段と親近
感の深まるのを覚えた。同居メンバーは現在江戸川乱歩賞作家として活躍されている斎藤法学士、土
木工学のベテラン朝倉工学士、大畑工学士、飯野工学士、電気工学のベテラン小泉工学士など一廉の
侍が揃っていたので、松本さんはご専門外の話題にも少なからず興味を懐かれたようであった。

ある日のこと、斎藤法学士から思いがけない提案が持出された。それは「技監室の空気の汚染を防
止してお互の健康を保持するために今後室内での喫煙をコントロールしよう」という趣旨のもので、
今でいう嫌煙権の発動であった。同居メンバーの中でも特に愛煙家と目されていた私と松本さんとを

主な対象としての発言のようであったが松本さんは早速これに同意され、この提案が実を結ぶように私に禁煙を協定しましょうと持掛けられた。円満裡に室内の平和を維持しようとの松本さんの心遣いには私も返す言葉はなく、善は急げと松本さんに協定文案の作成をお願いした。

松本さんが起案された協定は緩厳宜しきを得たもので、兩名は相互に禁煙を誓い万一違反した場合には相手方に申告して贖罪の証として一席設けること、特に年末年始の休日中に限り協定の適用外とすることなど、花も実もあるものであった。協定は半年余り遵守された。しかし意志薄弱な私は何かの弾みで再び喫煙を嗜むようになり、松本さんに陳謝して一席設けさせていただく仕儀となってしまった。しかしそのころ松本さんは精根を傾けておられた「市民生活白書」の執筆にお忙しく、そのうちにということで延び延びになっている間に、思わぬ月日が流れていた。終いには松本さんも「あれは時効ですよ」と取り合われなかったので、協定の履行は私が瞑目して松本さんと再会できる日まで無期延期となってしまった。

その後松本さんは横浜市をおやめになって相模原市長選に立候補されたので、私は早速事務所へお伺いしたのであったが、遂にお目にかかることができなかつた。虫が知らせたのか何となく心残りを覚えた。町田の教会での最後の対面とき、私は漱石の句「有る程の菊抛げ入れよ棺の中」を思い浮かべながら、心からご冥福をお祈りしたしだいであった。

(元横浜市技監)

市民松本さんの「横浜と私」

田村 明

松本さんは徹底した市民派であった。しかも松本さんの市民は抽象的、一般的な市民ではなく、個性をもっている一人の市民である。そうした市民の一人であり続けた松本さんはよく私にこういった。「田村さんは役所に入った時期は私とあまり変らないのに、よく役所になじんでいてびっくりしますね。」私自身があまり役所的であったとは思っていないし、他人から思われてもいなかったが、市民松本さんからみればそう見えたのだろう。それほど役所は松本さんの市民から見れば遠い遠い存在であった。

松本さんは、市に籍をおきながら、その「役所的なるもの」に対して常に不信と怒をもっておられた。松本さんにとって役所は厚顔不遜で、市民からかけ離れた安全な場所を身をおく限りなく遠い存在であった。市民自治の主導的な立場にあり、少くともその実践を試みている当時の横浜市でさえ、それは「役所的なもの」の例外とは見なかつたのである。

松本さんは市の若い意欲のある市民的な人々を育ててくれたし、松本さんに影響を受けた人々は数こそ多くはないが質的には大きいものがある。それでもなお、どうしようもなく取りつく島のない

「役所」「行政」というものに対して、「市民からの見方を失なわなかった人である。

それが最もよく發揮された仕事は、昭和四十六年に出した市民生活白書「横浜と私」であったろう。市民生活白書とは、自治体が市民に向けて、市民生活や市政を分りやすくありのままを理解してもらい問題提起をしようというものである。三八年飛鳥田横浜市長のまず第一の仕事のひとつであった。当時はこのような白書を出している自治体はなく、マンネリ化していた役場の行政の中では画期的な仕事であった。それまで中央の下請機関化していた自治体が、市民に向けて問題を提起しようというのは当然といえは当然だが、当時としては考えられなかったのである。

第一回の白書は昭和三十九年二月に、第二回は四一年一月に発表された。いずれも変形判でモダンデザインされたものであり、白書をだすこともそうだが、デザインとしてもその頃の自治体出版物としては異色のものであった。しかし、二回も出すとどうしてもマンネリ化する。市の状況や問題も数年でがらっと変わるものではない。そこで第三回は当時企画調整局の都市科学研究室長をしておられた松本さんにお願いくることになったのである。白書の趣旨からして、もっと広く市民に親しまれる読みものになるようにしたいという方向が確認された。私も、そこで市民の家庭と識者の対話といった形にしたら読みやすいのではないかとという案を出した。

実際の編集はすべて松本さんにおまかせした。それが昭和四六年一月に出された「横浜と私」であった。最もハンディで一般の読者にもなじみやすいB6判三九九ページタテ書き二段組みのものであった。当時こうしたものを一般に市販する風習は少なかったが、三二〇円で売ったところ、たちまち

品切れ、増刷を二度するというありさまであった。これも徹底して本当に市民に読んでもらうという松本さんの編集の成果である。最近では各自治体ともかなりの水準の出版物を出すようになってきたが、この白書は飾らず実質的に読ませるものとして、まだこの松本市民白書をこえるものはない。いわゆる役所的刊行物の臭を感じさせないもので市長の挨拶などもついていないし、「市民生活白書」という文字は小さく扱い、「横浜と私」という書物になっているのである。

第一部のトピラには「市民の自発性と創意は、住民自治と人間回復の都市づくりにとって欠かせない要素である。」と文字がきざまれる。そしてページをあげると、1、市民は訴えるとして、七月一五日の手紙とある。まったく任意に選んだある一日の市民から市長への手紙が紹介される。それは二〇万人市民(当時)からみれば全くの断片かもしれない。しかし抽象的な市民ではなく、確実に具体的な市民が現実そこに現れ、悩みや、希望や、事実や、反対や、はげましが語られており、そこから窓は小さくても一人の具体的な市民から市政を見ようとしたのである。

「横浜と私」という題も松本さんらしい突きはなし方であった。横浜は私から一っぺん外にある存在になる。そこで「私」という独立の個人としての立場もはっきりさせ、その上で横浜を見ることになる。役所の押しつけの白書ではないのである。それが分った上でないと市民自治の市政は生れない。ひと頃とちがって、選挙の都合上からか誰でもが「市民」や「市民参加」を言うようになったが、本当の市民に近い市政の道はまだ遠いことを実感しておられたのだろう。

松本さんの市民は理想化された抽象的的市民でもなく、また多数をたのんでしか行動しない市民でも

ない。あくまで独立の人格をもち、さまざまなおもつ一人の市民であった。美しき言葉で語るよりも、そうした市民に基礎をおくことを考えなおすべき時期である。(法政大学教授・元横浜市技監)

松本さんの言葉

中川 久美子

関内駅から横浜市の都市科学研究室への道は一分とないのだが、このわずかな間に松本さんの姿が胸を横切ることが多い。仕事が引けた帰り道、よく一緒に歩いて帰ったからかも知れない。何だかおもしろい事をしゃべりながら、つい興に乗って横浜駅までに話が終わらず、喫茶店で続きを話す、などということもあった。よく話をし、よく一緒に歩きまわり、そして書いた原稿をよく直された。

いつだったか梅雨の晴間の暑い日であった。横須賀線に乗って湘南方面のあるリハビリテーションの施設へ出かけた。目指す面会の相手は「市長への手紙」の差出人の一人である。この人は、東北の一地方から上京したのだが、都会の生活に不適應を起し、少し精神の異常を訴えている若い男性であることが文面から推し測られた。手紙には「市長さん助けて下さい。十円玉が光ってみえます」というようなことが書いてあり、何年かにわたり何回も手紙を出していた。市民生活白書『昭和五〇年版・私の横浜』(松本さんは、この題名に決まった時、「半分敗北です」と語っていた)作成のため

に、盛りだくさんの手紙を読んでいる時、「あれ、また出している」と私が気づいたのだった。

ともかく、この人と面と向かって、私は何を言っているのやらどぎまぎしていた。松本さんは澄ました顔で「どうしていられるかと思いましたが」と言い、相手は「もう大丈夫です」と答えていた。近況を少し聞いただけで、話は五分もかからなかったように思う。私は、何だかたくたくに疲れて帰ってきたのを記憶しているが、その人のことはどこかで書かれたりすることもなく、終わっている。

こういう取材に何回となく同行したのだが、とりわけこの人に会って何を聞きだす、という目的はつきりしたものは少なかった。仮説とか枠組みとかがフィールドワークの前提にはつきりしていなければいけない、という説もあるが、松本さんの場合は、持前の鋭い嗅覚で進めていき、言葉は後からついてきていた。まず、相手の状態を知ること、知ることの中で問題の輪郭を描いていくのである。観念や概念の操作が、現実の具体的なプロセスの中で末端微塵に吹っ飛んでしまふ、ということをこの作業の中で思う存分味わった。

「見出しのつくような記事を書くな」と新聞記者時代によく言ったものだ、と自ら語っておられたが、現実のプロセスというのは、ほんとうに重層的な関係の上に成り立っているもので、一面のみを強調したキャッチフレーズには嘘がつきまとう。そういう嘘の言葉がマスコミや行政の政策担当者によってバラまかれていることを、松本さんは憂慮していた。しかし、子供だましのような政治性が案外に組織の中に根強くあるのも事実だ。そしてその手の言葉は、具体的な状況(関係)の中では役に立たないが、松本さんの強烈な方向感覚に裏づけられた言葉は、確かに生きていたし、今も生きています。

と思う。

私たちの仕事は、こうして巨大組織や大きな言葉の合間を縫うようにして進められていたのだが、転倒した組織のメカニズムは強靱であった。

ある時、「カフカの小説っていうのは、関内駅に降り立った時の気分を拡大したみたい」と呟いてられたことがあった。虚無感だけを強調した、色彩のない世界、という意味であろうか。私にとって密度の濃い年月であったが、松本さんにとっては疲労を蓄積された七年間であったのだと思う。

退職された後も、時々市役所のそばまで来ては、枯れた植木鉢に水をたっぷり注ぐように励ましの言葉をかけてくださった。そんなことももうないのだけれど、何となく手紙を書きたくなくて、はどこに宛てたらよいかしら、などと迷うから不思議である。天国の住所を教えてください。

(横浜市都市科学研究室)

きびしく優しくかった読者

——私の中の松本さん——

中村 紀一

一昨年、昨年と私はかけがえない人々を喪った。学生時代からの恩師蠟山政道先生と私の論文の最も良き読者松本得三さんである。

私達が初めて意識的に出会ったのは横浜市都市科学研究室で、以来「先生」と呼ばれた私はこのきびしくも優しい読者の前に、ほとんどの論文を提出することとなった。

七一年冬の「道路公害と住民生活」は松本さんの依頼であった。刊行後、合評会が開かれ、松本さんは「……結局、道路沿いのどこかが、道路公害反対運動の口火を切らねば……」と書いた「どこかが」の部分がとくに印象に残っている、と語られた。この頃、私達は国道一六号沿道の一角で小さな住民運動を始めていた。木枯し吹きすさぶ中、私は「先生にほめられた小学生」のようにホクホクしながら家路についた。

「情報の公開」を考える機会を与えてくれたのも松本さんである。「『知る権利』と市民参加」掲載の七二年九月『調査季報』の「あとがき」を松本さんは簡潔に次のように書く。「『市民参加』『情報の公開』『住民の知る権利』——いずれひとつを抜きにして考えることはできない、三位一体の問題である」。当時、こうした認識をもちえた自治体職員が何人いたであろう。「情報の公開」はその後、私の重要な研究テーマの一つとなった。

七六年夏、『住民運動』私論をお送りした。折返し「一読、やすやす書評できるたぐいのものではないことを痛感させられます」との御返事が届いた。秋に入ってミニコミ紙『ふれあい』が送られてきた。そこには「本物の味わい」の見出しのもと「どの言葉も誠実でウツがない」という松本さんの書評が載せられていた。とても嬉しかった。

また、この頃、『行政学講座3』『広報と広聴』が発行された。初めての本格的論文に緊張して筆は

進まず、やっとの思いで書き終えたものであった。松本さんは「よいものをまとめられましたね」と言われてから、「しかし、結語の『参加』と『包摂』……『住民対策』と『住民自治』の対の組み合わせはどういう意味をもっているのですか」と質問された。「住民対策」と「住民自治」の順序は逆であった。文章を大切にしたいと思う私をはるかに超えて文章をきびしく吟味して下さる読者がそこにいた。私は二刷でその順序を訂正した。

七九年夏、「住民運動」をお送りする。腰を痛めて横になりながら松本さんは御返事を書かれる。「『革新勢力』今朝届きました。有難うございました。……きょうのところは早速先生の『住民運動』だけを拝読しました。「展望」の項にふれて「……『内省化』が『展望はない』というところまで行き着くことなしには今日の状況に変化を求めることは困難ではないかとも思われます」と記されている。安易に、「展望」を求めてはいけませんよ。松本さんは私の筆の走りを優しく戒める。

八一年春、「情報公開―参加行政の内実化」が発行された。松本さんから多くを学んだこの論文も、松本さんの病状を思うとお送りするのに躊躇があった。五月を過ぎてようやく決断した。御返事はいただけなかった。後日、横浜市のYさんから病床の松本さんが論文を読まれていたと聞いた。「Yさん、勝目のないたたかいを、専門化の傾向にたいして不断にいどんでいきますか」とたずねられたそうである。松本さんは身をもってこのたたかいを実践した。そしてこの問いかけは今、誰よりも筆者である私が受けとめねばならぬ。

八二年冬、読者松本得三さんはいない。私は私の中の松本さんと語りながらゆっくりと丁寧に文章を綴るだろう。かつて私が松本さんにお願いした原稿の中で松本さんのように書かれている。「すらすらと書いていくとすれば、きっと、あとから『ウソつけ』『ウソつけ』という言葉が追っかけてくるに違いない」〔市民意識の開発と自治体〕。(千葉大学助教授)

“時の流れ”の意味

中村 文江

もう何年か前のことです。力に余る問題をかかえて、私は、松本さんの教えを請いにお訪ねしたことがありました。

松本さんは、人は重荷を背負うことができるのだということ、そのためにこそ人の叡知はあるのだということ、そしてそれを時間がたすけてくれるのだということ、の三つを教えてくださいました。

当時、私にはその教えを身につくものとして、理解することができませんでした。そのために、さらたたび松本さんをわずらわせることになりました。松本さんは、何度でも同じ回り道に迷いこんでゆく私の話を、根気よくきいて下さって、はじめに教えて下さったあの三つのことを、表現を変えてはくり返して下さるのでした。私が私自身のことばで、わかるようにと。

松本さんは、「時の流れのもつ意味をじっと暖めて考えてみて下さい……」ともおっしゃいました。どこからか、既成の模範解答を性急に求めてこないと落ち着かないという、私の悪いくせを見ぬいていらっしやったのです。また、理性とか知恵によって考えつくしたと思っても、それが時の流れの中ではどんなにか相対的なものにすぎないかを、教えて下さったのです。

こうして私は、松本さんから、人間として生きてゆくために大切な心のあり方を教えていただきました。

最近、『ノンちゃん雲に乗る』を読みかえす機会がありました。ノンちゃんは雲の上のおじいさんに自分のことを話すうちに、おじいさんから「ひれふすころ」という大切な教えをうけることができます。私はフト、松本さんは私にとってノンちゃんのおじいさんだったのかなど、思いましました。私は、ちょうどノンちゃんがおじいさんにしたように、松本さんに私のことをいっしょけんめいお話しするうちに、知らず知らずに、大切なことを沢山教えてもらうことができたのだと……。

ただ、ノンちゃんのおじいさんは、高砂の翁のようにまっ白い長いひげの、本当のおじいさんでしたけれど、松本さんはあまりにお若くて、「おじいさん」では申しわけないようです。ある年の暮の忘年会で、ごいっしょにワルツを踊っていたいたり、別の合宿で柔軟体操をして、松本さんの方が、はるかにやわらかい身体だとわかったり、目をとじると浮かんでくるのは、とてもダンディなお姿ばかりです。

松本さんが亡くなられてから、半年がすぎてゆきました。とても悲しい思いをいたしましたのに、

時は過ぎてゆきました。私の心の「ノンちゃんのおじいさん」に、また、いろいろお話ししたならば、永遠の時間の中にある天国から、「時の流れのもつ意味を考えて下さい……」と、お答えがかえってくるような気がしています。

(ナルニア書店編集者)

松本さんとの対話

鳴海 正泰

昭和四十三年の秋頃だったろうか。東京本社の内政部長時代に知り合っていた松本さんが、市役所の私の部屋に不意にその柔和で小柄な姿をあらわした。大阪本社の論説委員に移って、地方政治分野にすぐれた社説をのせていたことを知っていたので、思わず「何時東京に……」と立ちあがったものだった。氏は朝日がそろそろ定年になるのだが、ついでには自治体の實際を現場で確かめてみたい。どんな場所でも待遇でもいい、横浜市政のなかで仕事をしてみたい。飛鳥田市長に紹介してくれということであった。

飛鳥田市長と中学の同級生だった本社の岡田任雄氏からもお話があり、私たちは喜んで革新市政の一翼に参加してもらおうこととなった。新設の都市科学研究室長になっていた。それから五十一年に退職されるまで、七年の間職場を共にすることになる。しかし、振り返ってみると、正直いって

その七年間、私と松本さんとは毎日顔を合せながら、ほとんど雑談が多く、深い議論をしたことがあまりなかったことに気がつく。

私の横浜市政での仕事は「政治の現実と、行政の習俗と、市民の論理」の三つの狭間のなかで、市長という権力の立場から、まさに一時間おきに「仕事を処理」することであった。松本さんは一貫してその「処理」される市民の側の痛みから考える立場を崩さなかった。この二つの行為の間には埋めつくせない深い断絶があることを、私たちは知っていた。松本さんの眼は仕事にとび回って席を暖める暇もない私に、同情のまなざしと共に、絶えずそれでいいのかなと問いかけていた。しかし、松本さんは私と向きあっても、決してそのことを言葉にすることがなかった。私もあまり言わなかった。

松本さんの内側に次第にふくれ上っていく情念と諦観の交互の動きを、私は痛いほどよくわかってきた。私がかつていたことを松本さんもわかっていた。それこそ二人の話題にするにはあまりにも深くかつ重すぎて、簡単な言葉としてはならないことが、暗黙の了解になっていたように思う。だからこそ私は松本さんの眼と言葉を畏れていたのだ。そしてその「正義」を畏れる気持ちを大切にしたいと考えつづけてきた。松本さんが少しずつ革新市政の現実に失望していく様子がよく見えながら、それをとどめられない現実のなかで、私もいらだちながら流されていた。松本さんは黙々と若い職員と交流をつづけていた。

そして松本さんは五十一年に、飛鳥田市長は五十三年に、私は五十五年に横浜市政からはなれた。

五十六年夏、強い日差しの中になに主への祈りの声が教会堂にひびくなかで、私が畏れていたものは、実は主の声そのものであったことに、はっきり気がついた。そして七年間、私は松本さんと深い対話をしつづけていたことに改めて確信をもった。松本さん、どうか、そうではないと言わないで下さい。

飛鳥田市長も松本さんも、それぞれ一粒の麦を自治体に蒔かれた。それは見かけはちがっても、同じ種のものである。最近の厳しい風土のなかに耐えながらも、少しずつ大きく育ちつつあることに、新しい曙光を見る思いがする。

(関東学院大学教授・元横浜市専任主幹)

松本さんに教わったこと

横山 悠

人は一生の間に多くの人々と出会いますが、いつまでも心に残る人との出会いはそう多くありません。松本得三さんとの出会いは私にとって素晴らしい人に出会えた貴重な体験でした。松本さんと共に一つの時代を過ごさせていただいたことは、これからの私の人生を歩む上でかぎりない大きな励みになると思います。松本さんの残された言葉の一つ一つやあの優しいまなざしは、私にとって終生忘れられないものとなるでしょう。

私の学生時代にフランスから哲学者サルトルがやってきて、知識人の話をしました。

「知識人は孤独です。だれも彼に委任状を、与えてはいないのです。ところで、これが知識人の矛盾のひとつなのですが、彼は同時に、他の人間が解放されることがなければ、自己を解放することもできません。」

松本さんは知識人だったと思います。などと書くと、松本さんに言下に「俺は違うゾ」と否定されそうですが、私にはそのように思えてならないのです。

情報公開の問題、福祉行政論、住民運動等々私達の職場である行政の諸問題について松本さんは、的確な診断とメスを下されるときもに、将来に向けてなすべきことを具体的に示されたと思うのです。しかも、よくあるように難解で抽象的な言葉をふりまわすことなく、行政の現場に身をおいて、具体的な処方箋を示されました。

福祉問題をテーマに「調査季報」を一緒に編集させていただいた時のことです。福祉関係の職場の十数人を訪問し、取材に歩きました。一通り取材を終えて「誰れの話が一番参考になりましたか」と尋ねました。「知恵遅れの子供の施設で野鳥の巣箱を作っている人の話がよかった。あの人の話にはウソがなかったようだ」と言われたのが深く印象に残っています。この話は、良寛としての松本さんのイメージを連想させます。

良寛といえば、アッシジの聖フランシスコや道元に代表される「中世世界」に松本さんは想いをほせておられた気がします。

西尾実さんの『道元と世阿弥』に次の文章があります。

「日本の中世文化は、人間を深く究め、その主体的可能性を発掘しようとする生き方によって生産されたものである。……近代文化は、……対象としての自然および社会を究め、そこに行なわれていた法則を発見することによって、対象世界を客観的に認識し、それを支配しようとする生き方によって生産されつつある。……近代文化は人間の主体性を喪失することによって、成立し、発展している。これこそ人間の危機でなくて何だろうか。……わたしは、そういう来べき時代を創造するエネルギー源として、中世文化の一端に発掘のつるはしを入れようとしている。」

松本さんに教わった中で私にとっての最も重要なテーマになりつつあるのが、「人間の主体的可能性」の問題だろうと思います。これからも足もとをみすえながら、一步一步掘り下げて検討していきたいと考えています。

(横浜市経済局)

アサヒシンブンオオサカヘンシユウキヨクチヨウ・クワタコウイチロウ　アサヒシンブンセイブホンシヤ
 ヘンシユウキヨクチヨウ・アオヤママサシ　アサヒシンブンナゴヤホンシヤヘンシユウキヨクチヨウ・サエキ
 ススム　アサヒシンブンシユツパンキヨクチヨウ・ワクイシヨウジ　アサヒシンブンナゴヤホンシヤヘンシ
 ヌウキヨクジチヨウ・ムラカミヒロシ　アサヒシンブンオオサカホンシヤレンラクブチヨウ・フクシマケンジ
 アサヒシンブンナゴヤホンシヤカイブチヨウ・タニヒサミツ　アサヒシンブンセイジブチヨウ・シバ
 タカハル　アサヒシンブントウキヨウツウシンブチヨウ・ナカジマキヨシゲ　アサヒシンブンロンセツイ
 シンツ　アサヒシンブントウキヨウツウシンブ一ドウ　アサヒシンブンナゴヤホンシヤカイブドウジン
 カイイチドウ　アサヒシンブンセイジブスイヨウカイイチドウ　アサヒ・ハヤシダシゲゴロウ　アサヒシ
 ンブンシヤシヤユウ・カジハラミツヨシ　サツポロアサヒ・ムラノ
 (順不同)

編集後記

一九八一年七月一二日、松本得三氏の告別式を終え、相模原の松本宅に落ち着いた参列者の間に、
 氏の生前の思い出話がさまざまに語られた。それはつきることなく続くようであったが、その中から
 自然に、氏の追想と論文集を兼ねて一本まとめてみようとの声がおこった。そして居合わせた人々が
 中心になって「松本得三氏追悼文集刊行発起人」の名簿がつくられた。

執筆者については松本氏の生前をそれぞれの時代に即してまとめていただける方を考慮し、依頼は
 発起人の責任で行った。何分にも短時日であり、大切な方を見落としていることも考えられる。なに
 とぞ御寛恕いただきたい。

数度の編集会議を重ねて一二月中旬に依頼状を発送。翌八二年三月中旬にすべての原稿が集まっ
 た。

編集方針としては、第一に執筆者本人の原稿を尊重し、送り仮名、字体など、あえて統一すること
 はしなかった。第二に、追想文の配列は、学生時代、朝日時代はほぼ時代を追って、横浜時代は筆者
 名の音順とし、晩年の最後に御家族の文章を掲載した。なお、筆者の肩書は執筆当時のものである。

一方、第三に、松本氏の論文については朝日時代は署名原稿のほとんどを網羅し、横浜時代は主要

なものを収録した。また、晩年の「神学講座の聴講を終えて」は今回初めて、印刷に付されたものである。

表紙の「目にうつるものがまことに美しいから」との題字は「知恵の書一三―七」から松木氏が生前書き残された、私達への最後の伝言であり、直筆である。

編集をほぼ終えた頃、幸子夫人から一編の詩を手渡された。松本さんの詩であった。

一九八〇、七、一、火

北里へ行く日 台所にしじみを買ってあった。

静かな部屋の中で それは生きていることを鮮明に感じさせていた。

しじみよ ポールの底で静かに息づいている

しじみよ

お前達は そこでどんな夢をみているのか

六五年間も生きながらえた男がなおも

自分の肝臓をいたわろうとして

いま お前達の命を ねらっている

やがて この緑の光さす七月の台所の窓辺に

夜と霧の小さな世界が出現するにちがいない

松本得三氏追悼文集刊行発起人

伊藤 源之 岩垂 弘

岡村 駿 小野 勝喜

轡田 隆史 佐々木寛志

辻 謙 中川久美子

中村 文江 仁瓶 康平

村 幸彦 横山 悠

岡田 任雄

木原 啓吉

白井 伝平

中村 紀一

沼口 好雄

だが お前達の束の間の生涯について語るものは
誰もいないだろう

しじみよ 人気のない台所の片隅で

お前達は いま どんな歌をうたっているのか

一九八二年五月

(事務局 中村紀一・文江)